

【書評】

ダニー・ラフェリエール著

『帰還の謎』（小倉和子訳）藤原書店 2011年

『ハイチ震災日記 私のまわりのすべてが揺れる』

（立花英裕訳）藤原書店 2011年

Dany Laferrière,

L'Énigme du retour, Boréal 2009 ; Grasset, 2009.

Tout bouge autour de moi, Mémoire d'encrier, 2010 ; Grasset, 2011.

廣松 勲

HIROMATSU Isao

1980年代以降、「ケベックの作家」というカテゴリーには、多様な民族文化的出自をもつ「移民作家」が含まれるようになった。彼ら「移動する作家 *écrivain migrant*」(Naïm Kattan)とも呼称される作家たちは、様々な社会文化的文脈（ヨーロッパ、ラテン・アメリカ、カリブ海域、中近東、アジアなど）を自らの作品制作の土台としつつ、「ケベック文学」という文学制度のなかで独自の市民権を獲得するまでに至った。確かに、これら「移動する作家」や「移動するエクリチュール」といったカテゴリー自体は、近年になって生まれたものである。しかし、Daniel Chartier も述べるように、複数文化の狭間で作品制作に取り組む作家たちは、ケベック文学がその固有の文学制度を形成し始めた頃から、つねにすでに存在していた。とはいえ、移民作家の言説がケベックの文学制度の中で承認され始めたのは、特に1970年代以降、種々の文芸雑誌（特に *Dérives*, *Möbius*, *Spirale*, *Vice versa*）を介して、彼らの発言が文学的領域のみならず、より広く社会文化的領域において耳目を集めるようになってからのことであった。

このようにケベック文学という文学制度が変容するなかで、ハイチ出身の移民作家たちは、大きな存在感を示すことになった。60年代から70年代にかけてケベック州に移り住んだハイチ系移民作家たち（Marie-Célie Agnant, Robert Berrouët-Oriol, Gérard Étienne, Jean Jonassaint, Émile Ollivier, Stanly Péan, Anthony Phelps など）が、「移動するエクリチュール」というカテゴリーの成立に大きな役割を果たすことになったのである。彼らの多くは、デュヴァリ

エ独裁政権下(1957年~1986年)に、強制的にせよそうでないにせよ、ニューヨーク、ケベック、キューバ、パリ、ダカールなどへと出国を余儀なくされた亡命知識人であった。このような大規模な亡命の結果、現代ハイチ文学は、フランス語とクレオール語のダイグロシアという二言語併用状況に加えて、「内 dedans」と「外 dehors」という「表象の二重の舞台 la double scène de la représentation」(Maximilien Laroche)と名付けられる社会文化的文脈のもとで生産されることになった。

彼らハイチ系移民作家のなかで、1953年にハイチに生まれ、1976年にケベック州へと移民したダニー・ラフェリエールは、特異な位置を占める作家であるとされる。例えば Alba Pessini は、ハイチ文学における「亡命」の価値変容を作家の世代によって3段階に分類した上で、ラフェリエールを「(第1世代とは異なり)亡命がトラウマを成していた第2世代」と「“亡命”がより自由な選択肢となった第3世代」との中間地点に位置づける。確かに、ジャーナリストであった彼は第2世代と同じく、生命の危険を感じて亡命の道を余儀なくされた。しかし、彼の物語において、故郷ハイチは、ノスタルジーの対象として描かれはするものの、第2世代の物語のように、幾度も回帰しながら精神を責めたてるトラウマの対象としては描かれないのである。ラフェリエールは、(一見すると)より軽やかに移動しながら、90年代をマイアミで暮らした後、再びモンリオールへと戻り、現在に至る。処女作『ニグロと疲れないでセックスをする方法』(1985年)から始まり、現在も書き継がれる「アメリカの自伝 autobiographie américaine」は、このような亡命や移動といった社会文化的現象を、多面的かつ多層的に描出することを試みた作品群である。

2011年に邦訳が出版された『帰還の謎』(2009年)と『ハイチ震災日記—私のまわりのすべてが揺れる』(2010年)は、それぞれが別様の形で、ラフェリエールの文学技法の完成形とみなしうる作品である。ラフェリエールの作品としては、本邦初訳である。まず、2009年にメディシス賞およびモンリオール書籍大賞を受賞した『帰還の謎』は、これまで以上に直接的に、亡命と帰還というテーマに焦点が当てられた物語である。あらずじは、次のようなものである。ニューヨークに住む父の訃報を受けた主人公・語り手「ぼく」は、葬儀に立ち会うため、ニューヨークへと出発することになる。しかし、その出発に至るまで、「ぼく」はモンリオールの町を彷徨し、さらにはケベック北部にまで大きく車で迂回することになる。漸くニューヨー

クでの葬儀に参列した後、「ぼく」は33年振りにハイチへと帰還する。首都ポルトープランスや幼年期を過ごしたプティ＝ゴアーズに滞在した「ぼく」は、さらに父の故郷バラデールへと旅立つ。そこからの帰路の船旅でアブリコという村に辿りついた「ぼく」は、「甘い眠り」に誘われる。この旅の途上でまどろむ「ぼく」の心象風景が描かれるなか、物語の終わりは「これで旅は終わりだ」(381頁)という唐突で謎めいた言葉とともに訪れる。

このような帰郷の物語は、『オデュッセイア』から現在まで連綿と続く、西欧文学の一ジャンルと考えることができる。また、Christiane Ndiayeによれば、本書で「ぼく」が幾度も引用する Aimé Césaire の長編詩『帰郷ノート』のように、帰郷の物語はカリブ海域諸島の多くの作家たちによっても描かれてきた。とはいえ、訳者解説が指摘するように、ここで日本の読者が連想するのは、むしろ『奥の細道』における芭蕉と曾良の道程であろう。このような連想は、冒頭の「日本の読者へ」における作者の説明を参照せずとも、ハイチ帰還以後の主人公と甥の旅や、散文形式と自由詩形式が交互に用いられた物語形式、さらには前作『私は日本作家である』における『奥の細道』への参照といった点からも妥当なものといえる。『帰還の謎』出版後のインタビューにおいて、作者ラフェリエールはこのような旅のお伴として登場する文学作品や作者を「パイロット・フィッシュ poisson-pilote」と呼び、自らの執筆技法の一つと位置付けている。

このような作品が日本語へと翻訳されること、それもまた一つの旅出と捉えることができるだろう。この旅路の随伴者となった翻訳者による訳文は、読み易く簡明な日本語でありながら、上記のようなラフェリエールの文体を巧みに掬い取っている。加えて、冒頭に挿入されたハイチおよびモンリオールの地図や適切な用語説明、さらに用意周到な訳者解説は、読者がより深くラフェリエールの物語世界に沈潜することを可能にする。2012年春には、本書と対になる小説『甘美なる彷徨の年代記 *Chronique de la dérive douce*』(1994年)の増補改訂版が出版された。その帯や背表紙でも述べられるように、本書は『帰還の謎』とは対照的に、「到着の謎」を扱った作品である。今後は、この小説作品も同じ翻訳者によって随伴され、日本語世界に到着することが待ち望まれる。

次に、『帰還の謎』と同時に翻訳が出版された『ハイチ震災日記』は、前者とは大きく趣を異にする作品である。本書は、2010年1月に現地でハイチ大地震に遭遇した作者ラフェリエールが、当時のメモなどを参考にしなが

ら、地震前後のハイチの状況を「ルポルタージュ風に」記述した作品である。本書は地震発生から数ヵ月後に *Mémoire d'encrier* から出版され、その後 2011 年には同出版社と Grasset の双方から増補改訂版が出版された。

ここで「ルポルタージュ風に」と括弧付きで述べたのには理由がある。それは単に、亡命する以前にラフェリエールが新聞 *Petit Samedi Soir* の政治文化面でルポルタージュを担当していたからではない。さらに、本作品がこれまでのラフェリエールの作品のように自伝的小説や「自伝的虚構 autofiction」として捉えうるのか、もしくは現実を“忠実に”記述しようとした「体験日記」なのかという点に関して、つねに議論の余地が残るからである。とはいえ、少なくとも読者が推測できるのは、本書がこれまでの作品よりも、さらに「小説」からは遠ざかったということである。例えば、家族の無事を確認した後、「私」が地震に関する作品を書くことを甥に向かって打ち明ける場面がある。そこで、甥は「日記を書くのは全然構わないよ。でも、小説を書いて欲しくないんだ」(68 頁)と述べる。この返答に対して、「私」は地震についての小説を執筆しないというよりも、それが「私」には無理であることを説明する。つまり、確かに本作品は作者ラフェリエールの日記と見なされるものの、しかし同時に、彼の作品の一つの特徴であるジャンル上の曖昧さは依然として残るのである。

物語形式についていえば、本作品は『帰還の謎』とは異なり、散文形式と自由詩形式が併存することはない。しかし、『帰還の謎』を含めたこれまでのラフェリエールの「小説」作品と同様に、必ずしもつねには連続性をもたない、幾つもの簡潔な断章を積み重ねることで構成された作品である。それはまるで、地震の現場ごとのスナップ写真を集めたアルバムのようなものである。さらに、ハイチ大地震直後の「黙示録を思わせる光景」(188 頁)を物語として再構成するために、このようなモザイク状の物語構成を採用したことは、内容だけでなく形式によっても、その光景の不透明で語りきれない現実を表現する方法であったともいえる。

このような断章形式は、作者ラフェリエール本人の習慣による部分が多いと考えられる。彼は作中人物と同じく、つねに「黒い手帳」を持ち歩き、その時々の瞬間的な印象・思考などを書き留める習慣がある。彼の作品制作においては、それらのメモを集積・統合する作業が重要な段階なのである。また、この地震で亡くなった Georges Anglade (翻訳書の 75 頁～76 頁にも言及がある)によれば、このようなラフェリエールの短文形式は、ハイチ文学

の伝統の一つ「ロディアンズ lodyans / l'audience」を継承したものであるとされる。この文学ジャンルの起源は、20世紀初頭のハイチで活躍した作家・ジャーナリスト Justin Lhérisson が *Le Soir* 紙上に掲載していた記事にあるとされる。「何も語らないが、すべてを読み取りうる」(Dantès Bellegarde) とも言われた彼の記事は、比喩や曲言法、皮肉などを用いて、極めて暗示的かつ簡潔に凝縮された文章であった。しかし、本書において主人公が述べるように、このような Anglade の仮説にはやや「大袈裟なところが」あるようにも思われる。ただし、この仮説の正否にかかわらず、本書におけるラフェリエールの簡易な文体は、時に非常に寓意的となり、短編作品のような魅力を産み出す。

一部の評論家は、ラフェリエールの本書を含めたハイチ大地震を扱った作品が、ハイチ文学の一つの潮流となるのではないかと推測する。例えば Joël Des Rosiers は、「黙示録以後の文学 littérature post-apocalyptique」というややセンセーショナルな言葉を用いながら、ハイチ大地震に言及した作品を論じた。事実、これまでにラフェリエールを含む複数の作家たちの短編集だけでなく、若手作家たち (Makenzy Orcel の *Les Immortelles*、Marvin Victor の *Corps mêlés*) やベテラン作家たち (Frankétienne の *Melovini* ou *Le piège*、Yannick Lahens の *Failles*) による小説や劇作が出版されてはいる。しかし、その数は潮流が生まれるほどは多くないのが現状である。

これまでのラフェリエールの「小説」作品と比べても、とりわけ本書の文体は読み易く、簡潔な文章で書かれている。翻訳書では、このような文体が流麗な日本語で表現し直されているだけでなく、固有名詞の丁寧な語彙解説や簡易な年譜も挿入されている。読者は本翻訳書を通読することで、一作家のまなざしを通してハイチ大地震（以後）の状況を垣間見ると同時に、ハイチ社会の基礎知識をも知ることができるであろう。

(ひろまつ いさお 東北大学文学研究科博士課程
モントリオール大学フランス語文学科博士課程)

参考文献

Georges Anglade, *Le Dernier Codicille de Jacques Stephen Alexis*, Montréal, Plume & Encre, coll. « Controverses », 2007.

- Daniel Chartier, « Les origines de l'écriture migrante. L'immigration littéraire au Québec au cours des deux derniers siècles », dans *Voix et images*, Vol. 27, N° 2 (80), Montréal, Université du Québec à Montréal, hiver 2002, pp. 303-316.
- Maximilien Laroche, « Oraliture et littérature », dans *Sociopoética*, Vol. 1, N° 3, Recife, Editora da Universidade Estadual da Paraíba, 2009 (En ligne : « [http://eduep.uepb.edu.br/sociopoetica/publicacoes/v1n3pdf/09_maximilien_laroche.pdf#search='maximilien laroche oraliture'](http://eduep.uepb.edu.br/sociopoetica/publicacoes/v1n3pdf/09_maximilien_laroche.pdf#search='maximilien%20laroche%20oraliture') »).
- Christiane Ndiaye, « De Condé à Césaire : de quelques retours au pays natal », dans *De paroles en figures : Essais sur les littératures africaines et antillaises*, Christiane Ndiaye et Josias Sumujanga (dir.), Montréal, Harmattan, 1996, pp. 137-177.
- Alba Pessini, « L'effacement du paysage naturel dans la littérature haïtienne de la diaspora », dans *Romanitas, Lenguas y Literaturas Romances*, Vol. 3, N° 2, San Juan, Universidad de Puerto Rico, 2009 (En ligne : « <http://romanitas.uprrp.edu/espanol/volumen3/pessini.html> »)
- Joël Des Rosiers, « Haïti : Répliques. Naissance d'une littérature post-apocalyptique », dans *Le Librairie*, N° 65, Montréal, Les Librairies indépendantes du Québec, juin-juillet 2011, pp. 42-43.